

2020. 6. 28 (日) マタイ 21:8～11

**21:8** すると非常に多くの群衆が、自分たちの上着を道に敷いた。また、木の枝を切って道に敷く者たちもいた。

**21:9** 群衆は、イエスの前を行く者たちも後に続く者たちも、こう言って叫んだ。「ホサナ、ダビデの子に。祝福あれ、主の御名によって来られる方に。ホサナ、いと高き所に。」

**21:10** こうしてイエスがエルサレムに入られると、都中が大騒ぎになり、「この人はだれなのか」と言った。

**21:11** 群衆は「この人はガリラヤのナザレから出た預言者イエスだ」と言っていた。

<説教>

主イエス・キリストは、ろばに乗ってユダヤの都エルサレムに入って行かれました。

その姿は、ユダヤ人の王としては全く見栄えのしない、貧しくみすばらしく弱く低い格好でした。

そんなイエスを取り巻いていたのも、無名の弱い普通の人々からなる群衆でした。

彼らはイエスに対してどのような態度をとったのでしょうか。

**21:8** すると非常に多くの群衆が、自分たちの上着を道に敷いた。また、木の枝を切って道に敷く者たちもいた。

「非常に多くの群衆」の多くはエルサレムに来るまでずっと（中にはガリラヤから）イエスについて来た人々だったと思われます。

そしてエルサレムでイエスのことを聞いて知った人々もそこに加わったようです。

彼らが「自分たちの上着を道に敷いた」のは、昔北イスラエル王国でエフーが王になったときに、人々が自分の上着を脱いでエフーの足もとに敷いて「エフーは王である」と言った出来事（Ⅱ列王 9:13）から来ています。

そのように、群衆はイエスをユダヤ人の王と認めていました。

「木」とは「なつめ椰子」（ヨハネ 12:13）のことで、秋の仮庵の祭りのときに神の前での喜びを表すために用いられました。（レビ 23:40）

この過越の祭りのときも、エルサレムに向かっていた群衆は「木の枝を切って道に敷く」ことで、イエスをユダヤ人の王として喜び祝いました。

そして、

**21:9** 群衆は、イエスの前を行く者たちも後に続く者たちも、こう言って叫んだ。「ホサナ、ダビデの子に。祝福あれ、主の御名によって来られる方に。ホサナ、いと高き所に。」

この群衆の叫びは、「ああ主よ どうか救ってください。ああ主よ どうか栄えさせてください。祝福あれ 主の御名によって来られる方に。私たちは主の家からあなたがたを祝福する。」（詩篇 118 篇 25-26）に拠っています。

「どうか救ってください」というヘブル語（またはアラム語）の音訳が「ホサナ」と日本語では記されています。

欄外注には、「ヘブル語で『お救いください』の意味であるが、転じて賛美の叫びの定型句となった」とあります。

過越の祭りや仮庵の祭りのときにはエルサレムに集まる群衆がこの詩篇（118:25-28）を唱え交わしたということです。

それをここでは群衆は自分たちの真ん中にいるイエスのために歌いました。

イエスを「**ダビデの子**」なるキリスト、「**主の御名によって来られる方**」、「**いと高き所**」にお座りになる王、と群衆は叫び賛美したのです。

もっとも、この弟子たちをも含めた群衆のこのときのイエスについてのキリスト理解、王理解にはどこまでも地上的な、この世的な考えに影響された誤りが多く含まれていました。

この世の王の姿とは違って、苦難を受け、辱められて十字架で殺される貧しく惨めな王イエス・キリストをまだ正しく理解していませんでした。

このわずか数日後には、群衆はイエスを「十字架につけろ」と叫ぶことになり、弟子たちもみなイエスを見捨てて逃げてしまうことになります。

しかしたとえそうではあっても、このとき彼らが叫んだ言葉それ自体は正しい言葉でした。

それゆえイエスはこのとき彼らが叫ぶことを止めようとはなさいませんでした。

イエスはそんな群衆からの賛美と歓迎を受けてくださいました。

「どうせあなたがたも数日後には「十字架につけろ」と叫んでわたしを訴えることになるのだから、今叫んでいることは全くむなしく意味が無い。止めなさい。」とは仰いませんでした。

ルカの福音書には次のように記されています。

「するとパリサイ人のうちの何人かが、群衆の中からイエスに向かって、『先生、あなたの弟子たちを叱ってください』と言った。イエスは答えられた。『わたしは、あなたがたに言います。もしこの人たちが黙れば、石が叫びます。』」（ルカ 19:39-40）

さて、このように熱狂的と言えるほどにイエスを喜んでいた群衆に対して、イエスが今まさに王として入って行かれたエルサレムの人々はどうだったでしょう。

「娘シオンよ、大いに喜べ。娘エルサレムよ、喜び叫べ。見よ、あなたの王があなたのところに来る。義なる者で、勝利を得、柔和な者で、ろばに乗って。雌ろばの子である、ろばに乗って。」（ゼカリヤ 9:9）と予め呼びかけられていたエルサレムの人々—その代表が祭司長たちや律法学者たちと言っている—はイエスをどのように迎えたのでしょうか。

**21:10** こうしてイエスがエルサレムに入られると、都中が大騒ぎになり、「この人はだれなのか」と言った。

「**大騒ぎにな**」ったとは、「動揺させられた、震えさせられた（受動態）」という言葉です。

イエスが入られたエルサレムの都中（の人々）は、自分たちの王が約束通りに来て下さったと心から喜んだのではなく、その心は動揺させられたのでした。

そして喜び叫んだのではありませんでした。

ただろばに乗っただけの、なんの華やかさも力強さも無く、むしろみすぼらしい「**この人はだれなのか**」「こやつは何者だ」「こやつが王、キリストだとは群衆は何を血迷っているのか」と怪しみ訝（いぶか）ったのです。

かつてイエスがこの地上にユダヤ人の王としてお生まれになったことを知らされたエルサレム中の人々はヘロデ王と共に動揺しました。

また、貧しい両親に連れられてエルサレムの神殿に来ていた幼子イエスを見てキリスト

だと正しく悟って、喜び、神を賛美し、神に感謝をささげたのはシメオンとアンナの二人だけでした。

それから 30 年余り経ったこのときもエルサレムの人々の不信仰、霊的鈍さは相変わらずでした。

そんな都エルサレムの人々の態度に、群衆は冷水（ひやみず）をかけられたのでしょうか。

**21:11** 群衆は「この人はガリラヤのナザレから出た預言者イエスだ」と言っていた。

「ガリラヤのナザレから出た預言者イエス」、なるほどこれでも間違いではありません。

しかし今さっきまでは「ホサナ、ダビデの子に。祝福あれ、主の御名によって来られる方に。ホサナ、いと高き所に。」と賛美して叫んでいたのですから、その調子と比べればやはりトーンダウンであり、当たり障りの無い答えになってしまったと言えるでしょう。

ルカの福音書には、パリサイ人がイエスに弟子たちを叱って黙らせるように言ったことに先ほど触れました。

またこの後、マタイの 21 章 15 節では神殿の中で子どもたちが「ダビデの子にホサナ」と叫んでいるのを祭司長たちや律法学者たちが腹を立てたことか記されています。

それで、「こやつは何者だ」と言っていたエルサレムの中心人物は祭司長たちや律法学者たちだったのではないかと思われまます。

だとすれば、イエスについてエルサレムの人々から問われた群衆の告白がトーンダウンしてしまったのもわかる気がします（それが良いことではもちろんありません）。

やっぱり人が恐いし、殊にこの世の権威が恐かったのです。

イエスをだれだと言うか、目を光らせ、耳をそばだてている祭司長たち律法学者たちが牛耳っているエルサレムで、彼らの面前でイエスがキリストだとはっきり告白することは危険なことでした。

当時はイエスをキリストだと告白する者は会堂から追放される、つまりユダヤ人社会から排除され、全く孤立させられてしまうという恐怖がありました。

そして先ほど触れたように、イエスについての正しい知識や理解の不足がありました。

「こんなろばに乗ったみすぼらしい奴が我々の王か？キリストか？救い主か？そんなはずはない。我々権威としてはイエスなど知らない。イエスがキリストだとは認めない。」

そう言われて群衆はしゅんとしてしまったかのようです。

キリストは必ず苦しみを受け、それから栄光に入るということを弟子たちも群衆もそのときは知りませんでした。

『『恐れるな、娘シオン。見よ、あなたの王が来られる。ろばの子に乗って。』これらのことは、初め弟子たちには分からなかった。しかし、イエスが栄光を受けられた後、これがイエスについて書かれていたことで、それを人々がイエスに行ったのだと、彼らは思い起こした。』（ヨハネ 12:15-16）と書かれています。

このように弟子たちもそのときはイエスを正しく理解できず、後で思い起こして解ったのでした。

それで、弟子たちも群衆も自分たちの言葉の深い意味を良く知って叫んでいたわけではありませんでした。

しかしイエスは後に聖霊によって弟子たちにその意味を正しく悟らせてくださいまし

た。

そのとき以降、弟子たちは、祭司長たちや律法学者たちを恐れることなく、「人に従うより、神に従うべきです」（使徒 5:29）と言い、キリスト告白をトーンダウンさせることなく、キリストを正しく告白し、その信仰告白のおりに生きたのです。

今の私たちも基本的に同じ問題と直面しています。

教会の中では、キリスト者仲間のうちにいるときには「ホサナ、ダビデの子に」と言っている、教会の外に出て、家庭で、親族の間で、地域で、職場で、学校で身をもってその信仰の告白通りに生きようとする途端に困難にぶつかります。

「クリスチャンである前に国の一員だろ？何々家の一員だろ？何々会社の一員だろ？何々学校の、何々部活の一員だろ？イエスを信じて従うなんてことはうちでなくよそでやってくれ。皆と同じにやってくれなければ皆が困る。お前一人のわがままのために周りの皆に迷惑がかかる。それでどうしてもだめなら、このグループから出て行くしかない。それでいいな？それでも一旦逆らった以上それでただで済むと思うなよ。」等々

程度の差こそあれ、ほとんどいつもこんな（同調）圧力に私たちはさらされているのではないのでしょうか。

そしてともすれば、それに耐えられずに、いやときには耐えようとさえしないで最近流行の言葉で言えば早々と“自粛”してしまうほどです。

また時にはむしろ“証しのために”、模範たろうと、率先してこの世の要請に答えようとさえしてしまうのです。

そうやってイエスは私たちが命がけで信じて従う、生ける神の子キリストではなく、その言うことは聞くには聞くけど、強力なアドバイザーの一人、単なる人間の預言者の一人に事実上格下げしてしまうのです。

そうやって私たちに形造られたイエス・キリストのかたちが外からも内からも崩れて行く危険と誘惑がいつもあるのです。

それが聖書に記された出来事から、個人の経験から、そして日本のキリスト教会の歴史から教えられる教訓です。

いつも目を覚ましてそのことから目をそらさずに、向き合っていく必要があります。

私たちはイエスの私たち罪人に対する愛と恵みについて、ますます正しく知る必要があります。

私たち罪人に対する愛と恵み故に徹底的にへりくだり十字架の死にまでも従われたイエスについて、ますます正しく知る必要があります。

私たち罪人に対する愛と恵み故にイエス・キリストを私たちに与えてくださった神について、ますます正しく知る必要があります。

神に従うより人に従い、神を恐れるより人を恐れ、神を愛するよりこの世を愛し、神に喜ばれるよりこの世に喜ばれようとし、そうやって自分の身を何とか守ろうという、底なしに罪深く惨めな私たちのために、罪を贖うためにイエス・キリストが苦しみを受け、十字架の苦難を受けられたことを日々、正しく心に刻む必要があります。

「ホサナ、ダビデの子に。祝福あれ、主の御名によって来られる方に。ホサナ、いと高き所に。」との私たちの告白が、内輪だけで終わらず、この罪の世にあってあらゆる場面で実質のある真実なものであるように神のあわれみと助けを心から乞い願います。